様式 5-1:終了時活動報告書

2026年3月2日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

１．業務の概要	
（１）案件名	在日ブラジル人コミュニティにおける継承語教育やアイデンティンティを育む支援および移民劇を通した多文化理解促進事業
（２）実施団体名	Projeto Sementinha プロジェクト　セメンチーニャ
（３）実施期間	２０２４年１２月２日～２０２５年１１月２８日
（４）実施国	日本
（５）活動地域	日本・静岡県

（６）活動概要

①活動の背景：

ポルトガル語が第一言語である両親と、成長するにつれて学校など家庭外で日本語を多く使うようになる子供たちとの間で、コミュニケーションが難しくなる場合があるため、言葉を学ぶことで親子の心の距離が広がらないようにブラジルから日本に移住した日系ブラジル人の母親らが本団体を設立し、ブラジルにルーツを持つ幼児を対象に継承語としてのポルトガル語教室を実施してきた。

また、浜松市在住の日系ブラジル人の中には移民のルーツや歴史を知らない世代が増えているため、日系ブラジル人にとっては自身のアイデンティティを確立すること、日本人にとっては日系ブラジル人への理解を促進することをねらって、自らの経験を基にした日系ブラジル人の移民の歴史を伝える演劇を創作し、学校等で上演してきた。　これまで上記活動を実施してきたものの継続的な実施には至っておらず、またポルトガル語教室と同時並行した保護者向けの日本語教室を実施したいと考えていたことから、世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業への応募に至った。

②活動の目標：

ブラジルにルーツを持つ子供たちが、親子でのコミュニケーションを円滑にしたり自分のアイデンティティに誇りを持ったりすることができるように、継承語としてのポルトガル語に親しむことのできる場を提供する。

ブラジル人の子供とその保護者、ポルトガル語を学ぶ学生がワークショップを通して交流することで、ブラジル人の子や保護者は自分の文化や言葉に興味を持つ学生の存在を知ることでアイデンティティに誇りを持つきっかけとなり、学生は自身の学ぶポルトガル語の実践の場や多文化に直接触れる場となる。また、双方が地域で互いに交流することを通じて、次世代の多文化交流共のリーダーとなる人材を育成する。

２．業務実施結果

（１）実施した内容

〇移民劇の開催（2025.1.27,静岡県立磐田南高等学校　11.15,HYPE 浜松　11.29 静岡文化芸術大学）

日本とブラジルの移民の歴史をたどる劇「日本×ブラジル　融和の歩み」を上演した。磐田南高校では１２０名、HYPE、静岡文化芸術大学ではそれぞれ約６０名の鑑賞者があった。

ブラジルへ渡った日本人の苦労や「デカセギ」として日本に来ることを決意した日系人女性、日本で在日ブラジル人として生まれた子供の悩みなどを、ブラジルにルーツを持つ女性を中心におよそ１０名で演じた。劇中で使われた写真は全て演者やその家族の当時の写真であり、劇の内容も彼女たち自身のエピソードが基になっている。

磐田南高校では、鑑賞した生徒の約半数がブラジルなど外国にルーツを持っており、「自分たちの先祖のことを知ることができて興味深かった」「おばあちゃんの生まれ育った国を見てみたい、との劇中のセリフから、自分の両親もそのような思いで日本に来たのかもしれないと考えた。日本で生まれた自分はブラジルへ行ったことはないが、両親の生まれ育った国にいつか行ってみたいと思った。」と、日本とブラジルをつなぐ存在になろうとしている感想をいただいた。

などの感想があがった。

HYPE 浜松では、ほとんどの鑑賞者がブラジルルーツの方であり、劇中で子供が日本の学校に馴染めず思い悩むシーンと自身の体験とを重ね合わせて涙する鑑賞者も見られた。

静岡文化芸術大学では、11 月 29 日に日・ブラジル外交関係樹立 130 周年を記念して同学で開催された「ブラジルデー」の一環として公演を行った。同日の午前中に同学で武田淳准教授によるセミナー「コーヒーから見るブラジルと日本～コーヒー2050 年問題と日系社会の現在～」が開催されたこともあり、鑑賞者の殆どがブラジルに関心を持つ学生や教員であった。ポルトガル語を学び、ブラジルに興味のある学生も多く、移民を通じた日本とブラジルの関係について知ることができて良かったという声が上がった。また、静岡文化芸術大学では、外国にルーツを持たない日本人も劇に参加した。「日本人、ブラジル人の区別なく、劇を通して楽しむことができた。日本人がこの劇に参加することで、この劇が日系ブラジル人だけの特別なものではないということを知ってもらいたい」との感想をいただいた。

〇ポルトガル語教室（浜松学院大学にて）（2025.1.25 2.22 3.22 4.19 5.24 6.14 6.28 7.26 8.30 9.13 9.27 10.25 11.8）

浜松市近辺のブラジルにルーツを持つ５～１３歳までの子供たち（延べ 76 名、13 回実施）を対象に、日本で馴染みの深い「ももたろう」の話をテーマとして、ポルトガル語を用いて身体表現をしたり工作をしたりと、様々なアクティビティを行った。これまでには桃太郎や犬、鬼などの役になりきって、彼らの話す言葉を創造しながらポルトガル語で表現したり、おもちゃの楽器を鳴らしてどの場面の効果音として使うとよいかを話し合ったりした、活動はポルトガル語で行うことで、普段日本語を中心に話をしている子供もポルトガル語を使う良い機会となった。中には日本語しか話せない児童もいたが、適宜通訳を行ったりジェスチャーを交えて話したりすることで場の雰囲気に慣れ、一緒に活動ができるようになった。最

終回にはみんなで「マンゴー太郎」（ブラジル風に子供たちがアレンジした「桃太郎」）の劇を保護者の前で演じ、楽しみながらポルトガル語を使う良い機会となった。

〇日本語教室（浜松学院大学にて、ポルトガル語教室と同時開講）

ポルトガル語教室に参加する子どもたちの保護者を対象に日本語教室を実施した（延べ 43 名、12 回実施）。受講者のほとんどは日本暮らしが長かったり日本で教育を受けた経験があったりするため、日常会話で困ることはほぼない。そのため、文法的なことや歴史的なこと、地域の民話などを入れながら受講者の興味、関心のある内容で授業を進めた。オノマトペ（擬音語・擬態語）の使い方や音読の仕方、干支やひな祭り、単語の節句などの日本の年中行事、日本の他の昔話などについて講義を行った。また、受講者からのリクエストで日本語の助詞の学習をしたり、子供たちの劇を称賛するときの語彙を豊富にする学習を行ったりした。

全体を通して参加者は少なかったものの、その分、より参加者のニーズに合うものを行うことができたと考えている。

（２）実施成果：

〇移民劇について

地元の新聞でも取り上げていただいたことから、年間予定回数（１回）を大幅に超えた３回の実施をすることができた。高校、ブラジル人が多く集まるイベントホール（HYPE）、大学と、３回とも異なる場所で実施することができたため、多様な人々に劇を鑑賞してもらうことができた。

〇ポルトガル語、日本語教室について

【受講者数】

第１回	子供１０人	大人７人（オリエンテーション）	計１７人
第２回	子供　８人	大人３人	計１１人
第３回	子供　５人	大人３人	計　８人
第４回	子供　６人	大人３人	計　９人
第５回	子供　５人	大人２人	計　７人
第６回	子供　６人	大人２人	計　８人
第７回	子供　５人	大人６人	計１１人
第８回	子供　５人	大人３人	計　８人
第９回	子供　５人	大人２人	計　７人
第０回	子供　６人	大人４人	計１０人
第１１回	子供　４人	大人２人	計６人
第１２回	子供　７人	大人６人	計１３人
第１３回	子供　４人	（大人の講座は開講せず）	計　４人

【受講者の声】

子供…年齢やポルトガル語経験、住んでいる地域の異なる児童が一緒に活動することで、子供たちの交友関係が広がった。また、年長の子供が年少の子供に工作の仕方を教える場面やポルトガル語の分からない児童にバイリンガルの子供が説明する場面もあり、子供同士の交

流の輪が広がった。「毎回、今日はどんな活動をするのか楽しみ」「学校とは違う友達に会えるのがうれしい」などの声が上がった。

大人…比較的日本語を話したり書いたりできる方たちが集まったことから、日本語の授業だけではなく、日本の文化や伝統行事、歴史に関する講義も行った。「ゆるキャラの「家康くん」のことは知っていたけれど、浜松に住んでいた有名な人だとは知らなかった」「こいのぼりをなぜ飾るのかを知れて面白かった」などの意見が出た。また、受講者から「日本語の助詞について知りたい」とのリクエストがあったため、日本語の文にあてはまる助詞を選んだり、文を作ったりする授業を行った。子供達の劇の鑑賞では、習った日本語を使って子供の劇の良いところや頑張ったところを伝える姿が見られた。

（３）得られた教訓など：

参加した子供たち、大人が「面白かった」「勉強になった」などの感想を毎回伝えてくれることが、主催者たちの励みになった。また、参加者は日本に何年も住んで生活している家庭がほとんどであり、生活する上での日本語はあまり不自由していないことが分かった。しかし、子供はポルトガル語、大人は日本語の語彙があまり多くないため、自分の伝えたいことを必ずしも的確に表現できているわけではないことを実感した。

今回、ポルトガル語教室・日本語教室の活動では、年間を通して各回１０名前後の受講者にとどまった。始めはもっと人数を増やしたいと考えていたが、少ない人数であったからこそ、受講者一人ひとりと丁寧な関わりを持つことができたと考えている。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

今後は、教室の中だけの活動に留まらず、公共交通機関を使用して市内の公共施設へ出掛ける活動を何回か取り入れる。教室の中だけで言葉を学ぶのではなく、実際に体を動かしながら話すことが言葉の習得への効果が高いと考えたからである。

また、今後はブラジルにルーツを持つ人だけでなく、日本人やその他の国にルーツを持ち、ポルトガル語や日本語に興味がある人も対象としていく。様々な文化、ルーツを持つ人々が集まり、同じ目的を持って楽しむことを通して、より多様な社会に順応できる子供たちを育てていくことができたらと考える。

３．その他（エピソード・感想・写真など）

（１）活動中のエピソード・感想など

少数で活動していたことのメリットとして、受講者の思いが伝わりやすいクラスになったと考える。例えば、大人の受講者からは学びたいトピックのリクエストに答えることができたり、子供の受講者は劇「桃太郎」をブラジル風に「マンゴー太郎」として楽しむことができたりした。次回以降も、受講者の声を大切にしながら活動を続けていきたい。

（２）活動の写真

【体全体を使って劇のイメージを持つ】

【昔話から新たな語彙を見つける】

【劇の効果音を考える】

【桃太郎以外の昔話を知る】

【移民劇　スライドを交え実施】

静岡新聞に掲載

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

伴走支援制度があり、最後まできめ細やかに対応してくださった点がとてもありがたかったです。また、沢山の助成をいただいたことで今までにはできなかったこと、例えば移民劇の複数回公演や子供たちに豊富な教材を用意することができました。

また、人数がなかなか増えないことに悩んでいたのですが、人数をむやみに増やすよりも今のアットホームな環境の中で行うことができるのも良さの一つであるとコンサルテーションの時に伺い、見方を変えることができました。次年度からの活動は、ＳＮＳなどを使って人数を増やすことを念頭に置きながらも、参加していただく一人ひとりを大切にしながら事業を続けていきたいと思っています。